

現職教員を考慮した教員の配属マッチングの設計

倉持 誠

横浜市立大学大学院 国際マネジメント研究科 国際マネジメント専攻

2025 年 8 月 30 日

要旨

1 序論

1.1 動機と結果の概要

日本の公立高校では、教員の異動に関して、教員の31%が「可能なら別の学校に移りたい」と回答しており、年度当初には217名の欠員が発生するなど、希望と実際の配属の不一致が構造的に生じている。このミスマッチは教科欠員や授業負担の偏在を引き起こし、教育機会格差を拡大させている(OECD(2018), 文科省(2022))。

このようなミスマッチが生じる主因は大きく三つある。第一に、教員自身にも勤務校や地域、勤務条件に対する明確な選好が存在するため、人気校に希望が集中しやすいということである。第二に、各学校は教科ごとに受け入れ定員を伴う科目制約を抱えており、たとえ応募者が多くても希望者全員を受け入れられるわけではないということである。第三に、新規採用教員が毎年度一定数加わることで、既存の現職教員と新規採用教員を合わせた全体最適を図る必要が生じ、配属計画の複雑性が飛躍的に高まるということである。これらの要因が絡み合う結果、教員側の希望と学校側の需要を同時に充足させることが制度的に難しくなっている。以上の三つの要因 1. 人気校志向による希望の偏在、2. 科目ごとの定員を超過してはいけないという制約、3. 現職と新任を同時に調整することによる複雑性が同時に作用すると、現行制度では、「人員が足りない、または、超過する」という状態が避けられない。

教員の希望は一部の特色校・都市部高偏差値校に集中する傾向が顕著である。文部科学省では、埼玉県の募集32枠に対し150名(4.7倍)、宮城県でも19枠に75名(3.9倍)の応募が殺到している。東京都教育委員会の令和5年度公募結果も、中・高等学校共通枠では、名簿登録者数1617名に受験者は2962名(1.8倍)と募集枠超過が続く状況を示している。更に、採用見込み者数は、1020名とさらに倍率が高くなっている。一方で文科省(2022)によると、始業日時点で高校だけでも217名の欠員が発生しており、人気校への希望集中の裏側で配置が埋まらない学校が恒常的に生じている。現在、公立高校の教員は、主に都道府県教育委員会が一括して人事権を持ち、毎年実施される「異動希望調査(人事異動調)」を起点に配属が決められる。教員は10~11月頃に第一~第三希望校・地域などを記入し、校長経由で教育委員会へ提出するが、最終決定は科目ごとの定数調整や地域バランス、在任年数ローテーションを優先した教育委員会の裁量で行われる(長野県教育委員会(2024))。

各県の異動方針は「同一校勤務が6~10年を超えれば原則配置換」「全県的視野で欠員校を優先配置」と明記しており(広島県教育委員会)、個人希望は最終段階で調整弁として後順位に置かれる。実際、千葉県の方針も「地域間・学校間の過不足を県全体で調整し、適材適所を図る」と規定しており(千葉県教育委員会(2024))、人気校への希望集中と不人気校の欠員を同時に解消するアルゴリズムや客観指標は導入されていない。結果として、希望は反映されにくく、科目欠員等が発生したまま年度が始まるというのが現状である。実務では、人事担当が教員希望をなるべく考慮しつつ科目定員を充たそうと試みるも

の、希望が集中した教科・地域では定数オーバーで受け入れられず、一方で不人気校や欠員が出やすい教科は定数割れが残る。結果として、始業直前まで空席が埋まらず免許外担当・複数校兼務・長距離通勤といった“その場しのぎ”の配置が発生し、教員の授業準備時間を圧迫する。さらに年度途中で産休代替や退職が重なると、科目制約を守りつつ、現職全員を再配置する余地が出てくるが、現実的には困難であるため、欠員の長期化と希望未充足の負のスパイラルに陥りやすい。つまり、現行方式は三要因を同時に満たす設計原理を持たないため、「配属を決めようとしても決め切れない」「決めたとしても誰かが不満か欠員が残る」といった“うまくいかない”現象が構造的に生じてしまうのである。

本稿は、この課題に対し、経済学のマッチング理論を用いて、教員の希望を尊重しつつ制度的制約を満たす配属メカニズムを設計する。具体的には、1. 各学校の科目別定員を守り（科目制約）、2. 教員間の不公平感（正当化された嫉妬）をなくし（公平性）、3. その中で教員にとって最も望ましい配属を実現し（教員最適性）、そして何よりも4. 全ての現職教員の雇用を保証する（現職必置条件）という、4つの重要条件を同時に満たすことである。本稿で提示する主な結果は以下の通りである。まず、教員が単一の教科免許しか持たない単純化されたモデルでは、既存の理論的枠組みを応用することで、現職教員の雇用保障が、前述の1. 3. を満たした上で達成可能であることを示す（定理1）。さらに、拡張した教員が複数の教科免許を持つ条件下では、既存のアルゴリズムが機能せず、現職教員が配属先を失うケースが存在することを「動機付けの例（例1）」によって具体的に示す。この問題を乗り越えるため、本稿は「主たる指導教科」という概念を導入してモデルを精緻化し、「カットオフ調整アルゴリズム」を設計・提案する。本稿の、主たる貢献は、この提案アルゴリズムが、複数免許という最も複雑な条件下においても、常に本論文で定義した弱い教科公平性を満たし（定理2）、その結果として得られるマッチングが、現職教員の雇用を保証する（現職必置条件を満たす）ことを証明した点にある（定理3）。これにより、現実の教員人事制度が抱える複雑な課題に対し、理論的に裏付けられた具体的な解決策を提示する。

1.2 関連研究 (Related literature)

今回は「教員と学校」のような2種類の異なるグループに属する参加者たちをどのように組み合わせるかを考える。このような組み合わせ（マッチング）を二部マッチングと呼ぶ。二部マッチングは、Gale and Shapley(1962)で考案された。Gale and Shapley(1962)では、現実のマッチングに関する問題を数学的に定式化し、どのようにペアを組めば、当事者同士が今のペアよりもお互いを好む組み合わせが存在しないかを考えた。彼らの枠組みにより、金銭を介さない人員配置問題にもゲーム理論的な解が存在することが示された。

しかし、その理論の現実社会への有用性が広く認識されるまでには時間を要した。1980年代に入り、Rothが医学生と病院の人員配置問題を研究したことが、このギャップを埋める契機となった。Roth (1984)は、米国の研修医の労働市場における採用方式を分析し、現在用いられている配置方法のゲーム理論的特徴を解明した。彼はこの市場の現行の手法

を調べ、それが Gale-Shapley の提案した方法と極めて近いものであり、当時の医学生と病院の組み合わせ方法は病院側にとって最適な安定マッチングと同等であることを示している。Roth (1984) の貢献により、「安定性」(当事者同士が今のペアよりもお互いを好む組み合わせが存在しないこと) がマッチング市場の長期的安定運用に不可欠であることが国際的にも確認された。また、本研究を契機に、他の分野でも集中マッチングの導入が検討されるようになった。ほかにも、様々な市場で、本理論が活用されており、Roth (1984) が単なる分析に留まらず現実の制度設計を直接に方向付けた例と言える。

続いて、1990 年代には、Balinski & Sönmez が大学入試における学生配置問題へとマッチング理論を応用し、古典理論を政策設計に結びつける新たな展開を示した。Balinski & Sönmez (1999) は、中央集権的な大学入学試験制度にもとづく学生配置問題を新たなマッチング理論モデルとして定式化し、従来の制度を分析した。特に、トルコの大学入学者配置方法に重大な欠陥があることを明らかにした。そこで、彼らは、これらの欠陥を克服する代替メカニズムとして学生最適の安定マッチング方式を提案した。この理論分析により、学生側最適の安定マッチング(当事者同士が今のペアよりもお互いを好む組み合わせが存在しないマッチング) が受験者配置問題において望ましい原則であり、複数カテゴリーの試験得点という特殊要因があっても安定マッチング理論が有効に機能することが示された点で、本研究の理論的貢献は大きいと言える。Balinski & Sönmez (1999) の貢献により、マッチング理論が労働市場以外の分野にも適用可能であることが示され、特に政策当局が直面する制度設計問題に理論を活かせる道筋が明確になった。これはマッチング理論の応用範囲を大きく拡大し、理論と実践の橋渡しをさらに推し進めた転換点となっている。

しかし両モデルは、複雑な制約を想定していない。そこで、近年、複雑な制約を伴う市場に一步踏み込んだのが Kamada & Kojima (2024) である。彼らは、実際の保育園入所において従来の全員が満足する安定した割り当てが存在しない場合が存在することを指摘し、制約のある状況下でも優先順位を尊重した公平な割り当てが得られる新たな仕組みを提案した。また、自治体の保育所割当データを用いたシミュレーションにより、この公平な割り当て方式の効果を検証し、有効性を確認した。制約の緩和と公平性の両立によって参加者の満足度や全体の利益を高められる可能性が示された。とはいえ今回の研究である公立高校における配属問題にそのまま適応することは、以下のような問題点があることから不可能である。まず、人気校志向によって希望が偏っている点である。既存研究では、希望が特定校に集中した場合に、欠員校を同時に解消する手当てがない。次に、それぞれの学校と科目について定員が設定されている点である。既存研究では、制約は、学科などの1つの上限に対して設定していることが多く、複数科目を横断して上限を同時に守る公立高校の複雑な定員管理には未対応である。最後に、現職の教員を必ずどこかの高校に配属させなければならない点である。既存研究では、単年度の応募者のみを対象としており、既に在籍している職員を必ず再配置するという条件を入れていない。

本研究では、これらの問題点を同時に満たすメカニズムを構築し、教員配属問題に対

する実践的な解決策を提示する。具体的な、本稿の構成は以下の通りである。まず第2章では、問題を単純化し、各教員が単一の教科免許のみを持つ「基本モデル」を定義する。このモデルにおいて、既存の理論的枠組みを応用することで、現職教員の雇用が常に保証される安定的なマッチング（教員最適公平マッチング）が存在することを示す（定理1）。次に第3章では、教員が複数の教科免許を持つ、より現実的で複雑な「拡張モデル」へと分析を進める。この状況下では既存のアルゴリズムが機能しないことを例証し、その課題を克服するために独自の「カットオフ調整アルゴリズム」を設計・提案する。そして、この提案アルゴリズムが、複数免許という最も複雑な条件下においても、常に弱い教科公平性を満たし（定理2）、現職教員の雇用を保証するマッチングを導出可能であることを証明する（定理3）。第4章では、これらの理論的結果が持つ実践的な含意について考察する。最後に第5章で、本研究の結論と今後の展望を述べる。

2 基本モデル：教員が単一免許を持つケース

$I = \{1, \dots, m\}$ を教師からなる空でない有限集合、 $S = \{m+1, \dots, n\}$ を学校からなる空でない有限集合とする。また、 I_α を現職教師 (*currently employed / in-service teachers*) からなる空でない有限集合とし、 $I_\alpha \subset I$ である。各教師 $i \in I$ は、学校の集合 S とマッチしない状態 \emptyset の和集合 $S \cup \{\emptyset\}$ で定義される厳密な選好順序 \succ_i を持つ。各学校 $s \in S$ は、教師の集合 I の上で定義される厳密な優先順位 \succ_s を持つ。教師が持つすべての選好の組をプロファイル $\succ_I = (\succ_i)_{i \in I}$ で表し、学校が持つすべての優先順位の組をプロファイル $\succ_S = (\succ_s)_{s \in S}$ で表す。

各学校 $s \in S$ について、その制約は、実現可能な教師集合の族 $\mathcal{F}_s \subset 2^I$ によって与えられる。教師の部分集合 $I' \subseteq I$ は、 $I' \in \mathcal{F}_s$ であるとき、学校 s において**実現可能 (feasible)** であると定義される。したがって、一つの**問題 (problem)** は、組 $(I, S, \succ_I, \succ_S, \{\mathcal{F}_s\}_{s \in S})$ によって特徴づけられる。

マッチング (matching) とは、教師と学校の組み合わせを決める写像 $\mu : I \cup S \rightarrow S \cup \{\emptyset\} \cup 2^I$ であり、以下の3つの条件で定義される。

- (i) すべての教師 $i \in I$ について、その割り当て先は $\mu_i \in S \cup \{\emptyset\}$ である。
- (ii) すべての学校 $s \in S$ について、そこに割り当てられた教師の集合は $\mu_s \subseteq I$ である。
- (iii) いかなる教師 $i \in I$ と学校 $s \in S$ のペアにおいても、 $\mu_i = s$ であることと $i \in \mu_s$ であることが同値であるように、割り当てなければならない。

教師が担当する**教科 (subject)** を空でない有限集合 $J = \{j_1, j_2, \dots, j_k\}$ で表す。各教師 $i \in I$ について、 $A(i) \subset J$ は、各教師が担当可能な教科の集合である。この章では、任意の $i \in I$ について、 $|A(i)| = 1$ とする。つまり、各教師は単一の教科のみを担当する。便宜上、各教師 i が担当可能な教科 $j \in A(i)$ と、 $A(i)$ を同一視する。このとき、

$I_j = \{i \in I \mid A(i) = j\}$ は、教科 j の免許を持つ教師の集合である。各学校 $s \in S$ について、 $A(s)$ でその学校が募集している科目を表す。このとき、学校については、 $A: S \rightarrow 2^J$ とする。 $S_j = \{s \in S \mid j \in A(s)\}$ は、教科 j で募集を行う学校の集合である。

各学校 $s \in S$ は、教科 $j \in J$ ごとに特定のキャパシティ $c_s^j \geq 0$ を持つ。学校がある教科で募集を行っている場合は、その教科のキャパシティは正の数であり、学校がある教科で募集を行わない場合、その教科のキャパシティはゼロとなる。すなわち、すべての $j \in A(s)$ について、 $c_s^j > 0$ であり、 $j \notin A(s)$ について、 $c_s^j = 0$ である。

これらの教科制約の下でマッチング μ が実現可能であるとは、ある学校に任意の教科で割り当てられた教師の数が、その学校の当該教科におけるキャパシティを超えないことをいう。この実現可能性条件 \mathcal{F}_s は、次のように定義される。

$$\mathcal{F}_s = \{\mu_s \subseteq I : \forall j \in J, |\{i \in \mu_s : A(i) = j\}| \leq c_s^j\}$$

マッチング μ の望ましさは、いくつかの重要な特性によって評価される。マッチングが**実現可能 (feasible)** であるとは、すべての学校 $s \in S$ について、 $\mu_s \neq \emptyset$ ならば、 $\mu_s \in \mathcal{F}_s$ が成り立つことである。**個人合理的 (individually rational)** であるとは、すべての教員 $i \in I$ について $\mu_i \succ_i \emptyset$ が成り立つことである。ある教師 i が教師 i' に対して**正当な嫉妬を持つ (have justified envy toward)** とは、 $s \succ_i \mu_i$ 、 $i' \in \mu_s$ 、かつ $i \succ_s i'$ となるような学校 $s \in S$ が存在する場合をいう。したがって、マッチング μ が**公平 (fair)** であるとは、別の教師に対して正当な嫉妬を持つ教師が一人もないことである。最後に、マッチング μ が**効率的 (non-wasteful)**¹ であるとは、 $s \succ_i \mu_i$ かつ $\mu_s \cup \{i\} \in \mathcal{F}_s$ となるようなペア $(i, s) \in I \times S$ が存在しないことである。マッチング μ は、実現可能、個人合理的、公平、かつ効率的という性質を同時に満たすとき、**安定 (stable)** であると定義される。

Kamada and Kojima(2024) では、公平性と実現可能性をマッチングに求めた際に安定性が失われる可能性があることを指摘している。以下は、Kamada and Kojima(2024) に記載されている例である。

例1 (安定性を満たすマッチングが存在しない). 学校が1つ(s)、学生が10人(i_1, i_2, \dots, i_{10}) いると仮定する。全ての学生は、誰ともマッチしないよりは学校 s とマッチすることを望む。学校 s の選好順位は以下の通りである。

$$\succ_s: i_1, i_2, \dots, i_9, i_{10}.$$

奇数の添え字を持つ学生は学校にとって3単位の費用がかかり、偶数の添え字を持つ学生は4単位の費用がかかる。学校 s は20単位の予算制約があり、ある学生の集合が s にとって実現可能であるのは、その学生たちに関連する費用の合計が20単位を超えない場合に限られる。

¹<https://www.esri.cao.go.jp/jp/esri/archive/bun/bun203/bun203b.pdf> の p.16 参照

このとき、例えば $\mu_s = \{i_1, i_2, i_3, i_4, i_5\}$ となるマッチング μ を考える。このマッチングは、 $\mu_s \cup \{i_7\}$ が実現可能であり、かつ学生 i_7 が誰ともマッチしないより s とマッチすることを望むため、公平 (fair) ではあるが効率的でない (wasteful)。一方で、 $\mu'_s = \mu_s \cup \{i_7\}$ となるマッチング μ' は、効率性 (non-wastefulness) を満たすが、 $s \succ_{i_6} \emptyset$ 、 $i_7 \in \mu'_s$ 、かつ $i_6 \succ_s i_7$ であるため、公平性 (fairness) に反する。実際、この例には安定なマッチングが存在しない。これを示すため、まず公平性をマッチングに要求することから、 s とマッチする学生の集合は、ある $l \in \{1, \dots, 10\}$ について $I^l = \bigcup_{k=1}^l \{i_k\}$ という形式をとるか、 $I^0 = \emptyset$ でなければならない点に注意する。 $l \leq 5$ の場合、 $I^l \cup \{i_7\} \in \mathcal{F}_s$ かつ $s \succ_{i_7} \emptyset$ であるため、集合 I^l は効率的でない。一方、 $l \geq 6$ の場合、集合 I^l は実現可能ではない。

マッチング μ が**現職必置条件** (*in-service teacher condition*) を満たすとは、 $\forall i \in I_\alpha, \mu_i \neq \emptyset$ が成り立つことであり、全ての現職教師が割り当てられることをいう。

Kamada and Kojima(2024)では、例1のような制約がある状態で、安定性を保証することができないため、公平性、個人合理性、実現可能性を満たすマッチングを考えている。しかし、それに現職必置条件を置いた場合、公平性、個人合理性、実現可能性を満たすマッチングを保証することができない。以下にその例を示す。

例2 (公平性・個人合理性・実現可能性を満たすマッチングが存在しない). $I = I_\alpha = \{1, 2\}$ 、 $S = \{3, 4\}$ とする。全ての $i \in I_\alpha$ について $\succ_i = 3, 4, \emptyset$ 、全ての $s \in S$ について $\succ_s = 1, 2, \emptyset$ 、そして全ての $s \in S, j \in J$ について $c_s^j = 1$ と仮定する。このとき、マッチングは $\mu_1 = 3$ 、 $\mu_2 = 4$ となる。このマッチングは教員2は教員1に対して正当な嫉妬 (justified envy) を抱くため、公平 (fair) ではない。

公平性 (Fairness) の概念は、教科を考慮して弱められる。ある教師 i が教師 i' に対して**教科に基づいた正当な嫉妬** (*subject-justified envy*) を持つとは、 $A(i) = A(i')$ であり、ある $s \in S$ が存在し、 $s \succ_i \mu_i, i' \in \mu_s, i \succ_s i'$ が成り立つ時をいう。これは、両者が同じ教科を持ち、かつ標準的な意味で教師 i が i' に対して正当な嫉妬を持つことを意味する。マッチングが**教科公平** (*subject-fair*) であるとは、教科に基づいた正当な嫉妬を持つ教師が誰もいない状態を指す。

定義 1. マッチング μ は、以下の2つの条件を満たすとき、**教師最適公平マッチング** (*TOFM*) (*teacher-optimal fair matching*) となる。

- (i) μ は、実現可能、個人合理的、かつ公平であり、かつ
- (ii) 実現可能、個人合理的、かつ公平である、他のいかなるマッチング μ' に対しても、すべての教師 $i \in I$ について $\mu_i \succeq_i \mu'_i$ が成り立つ。

2.1 Kamada and Kojima(2024)の結果

kamada and kojima(2024)は、現職必置条件を要求せず、 $|J| = 1$ であるときを分析し、教師最適マッチング (TOFM) がカットオフアジャストメントアルゴリズム (cutoff adjustment

algorithm) を用いて求められることを示した。本節では、そのことについて詳しく説明する。

Kamada and Kojima(2024) の手法は、公平性、個人合理性、そして実行可能性を満たすマッチングを、有限束 (a finite lattice) 上の関数の不動点 (fixed point) によって特徴付けることである。

この特徴付けを確立するため、カットオフプロファイルの集合 $P := \{1, \dots, |I|, |I|+1\}^S$ を考える。この集合には、すべての $s \in S$ に対して p_s が p'_s 以下であるとき、かつそのときに限り $p \leq p'$ となる半順序 (partial order) \leq が与えられている。この空間は有限束 (したがって完備束 (complete) でもある。) である。

各学校 s について、 $i^{(s,l)}$ を、 s の優先順位に従って下から l 番目の学生とする (例えば、 s にとって最も順位の高い学生は $i^{(s,|I|)}$ であり、最も低い学生は $i^{(s,1)}$ である)。また、すべての $s \in S$ に対して $i^* = i^{(s,|I|+1)}$ となるような架空の学生 $i^* \in I$ を考え、各 $s \in S$ について選好 \succ_s の定義域を、任意の $i \in I$ に対して $i^* \succ_s i$ が成立するように拡張する。

カットオフプロファイル $p \in P$ が与えられたとき、各学校 $s \in S$ における「需要」を次のように定義する。

$$D_s(p) := \{i \in I \mid i \succeq_s i^{(s,p_s)} \text{ かつ } s \succ_i \emptyset; i \succeq_{s'} i^{(s',p_{s'})} \implies s \succeq_i s'\}.$$

この定義において、前半「 $i \succeq_s i^{(s,p_s)}$ かつ $s \succ_i \emptyset$ 」は、学生 i がカットオフ学生 $i^{(s,p_s)}$ と同等以上の順位であり、かつ学校 s を受容可能 (acceptable) と見なしていることを意味する。一方、後半「 $i \succeq_{s'} i^{(s',p_{s'})} \implies s \succeq_i s'$ 」は、 s が、学生 i がカットオフを通過する学校の中で最も選好 (most preferred) する学校であることを意味する。 s への需要は、これら2つの基準を満たす学生の集合となる。

以下に、 $D_s(p)$ の数値例を示す。5人の学生 i_1, i_2, i_3, i_4, i_5 がおり、学校 s の優先度リストは以下の通りとする。また、学校 s のカットオフプロファイルは $p_s = 3$ であり、カットオフ学生は i_3 とする。

$$i_1 \succ_s i_2 \succ_s i_3 \succ_s i_4 \succ_s i_5$$

また、学校 s' の優先度リストも同様に以下の通りとし、のカットオフプロファイルは $p_{s'} = 1$ であり、カットオフ学生は i_5 とする。

$$i_1 \succ_{s'} i_2 \succ_{s'} i_3 \succ_{s'} i_4 \succ_{s'} i_5$$

学生の選好を以下のように設定する。

学生 i_1 の選好： $s' \succ_i s \succ_i \emptyset$

学生 i_2 の選好： $s \succ_i s' \succ_i \emptyset$

学生 i_3 の選好： $s \succ_i s' \succ_i \emptyset$

学生 i_4 の選好： $s' \succ_i s \succ_i \emptyset$

学生 i_5 の選好： $s \succ_i \emptyset$

$$D_s(p) := \{i \in I \mid i \succeq_s i^{(s,p_s)} \text{ and } s \succ_i \emptyset; i \succeq_{s'} i^{(s',p_{s'})} \implies s \succeq_i s'\}.$$

上記定義から、まず、前半の条件である $i \succeq_s i^{(s,p_s)}$ と $s \succ_i \emptyset$ を満たす学生を選ぶ。これを満たすのは、 i_1, i_2, i_3 である。次に、後半の条件である $i \succeq_{s'} i^{(s',p_{s'})} \implies s \succeq_i s'$ を満たす学生を選ぶ。これを満たすのは、 i_2, i_3, i_5 である。ここで、両条件を満たす学生は、 i_2, i_3 である。したがって、学校 s における需要は以下ようになる。

$$D_s(p) = \{i_2, i_3\}$$

写像 $T : P \rightarrow P$ が、以下の条件を満たすとき、これを **カットオフ調整関数 (cutoff adjustment function)** と呼ぶ。

$$T_s(p) = \begin{cases} p_s + 1 & (D_s(p) \notin \mathcal{F}_s \text{ の場合}) \\ p_s & (D_s(p) \in \mathcal{F}_s \text{ の場合}) \end{cases}$$

ここで、 $(|I| + 1) + 1 = 1$ とする。

定義 1. マッチング μ は、以下の 2 つの条件を満たすとき、**学生最適公平マッチング (SOFM) (student-optimal fair matching)** となる。

- (i) μ は、実現可能、個人合理的、かつ公平であり、かつ
- (ii) 実現可能、個人合理的、かつ公平である、他のいかなるマッチング μ' に対しても、すべての学生 $i \in I$ について $\mu_i \succeq_i \mu'_i$ が成り立つ。

定理 1. カットオフ・プロファイル $p \in P$ がカットオフ調整関数 T の不動点であるならば、対応するマッチング μ^p は実現可能であり、個人合理的であり、公平である。さらに、もしあるマッチング μ が実現可能で、個人合理的で、公平であるならば、あるカットオフ・プロファイル $p \in P$ が存在して $\mu = \mu^p$ となり、その p は T の不動点である。

説明 この定理は、カットオフ調整アルゴリズムの理論的基盤を与える重要な結果である。まず前半は、あるカットオフ p が不動点に到達したとき、そこから得られるマッチング μ^p が常に三つの望ましい性質、すなわち「実現可能性」「個人合理性」「公平性」を同時に満たすことを保証している。後半はその逆を述べており、もしもあるマッチングがすでに三つの性質を備えているならば、それは必ず何らかの不動点に対応している、ということを示している。つまり、この定理により、「不動点」と「望ましい性質を満たすマッチング」とが一对一に対応することが明らかになる。このことは、カットオフ調整アルゴリズムを用いれば、理論的に適切なマッチングを漏れなく探索・構築できることを保証している。

不動点になるカットオフ値とそうでないカットオフ値について例を用いて説明する。まず、全ての例で共通となる市場の基本設定を定義する。学校は A, B の2校、生徒は $1, 2, 3, 4$ の4名が存在する。各学校の定員は、 $c_A = 1, c_B = 2$ である。学校側の生徒に対する優先順位は、 $A: 1 \succ 2 \succ 3 \succ 4, B: 2 \succ 3 \succ 1 \succ 4$ と定められている。一方、生徒側の学校に対する選好は、 $1: A \succ B \succ \emptyset, 2: B \succ A \succ \emptyset, 3: B \succ A \succ \emptyset, 4: B \succ \emptyset$ である。ここで \emptyset はどこにも割り当てられない状況を指す。

例1：不動点となるカットオフ ($T(p) = p$) まず、カットオフが $p = (p_A, p_B) = (4, 3)$ となる場合を考察する。この設定は、学校 A が優先順位最上位の1名までを、学校 B が上位2名までをそれぞれ通過させる状況を意味する。このカットオフに基づくと、生徒1は A のみ、生徒2と3は B のみを通過できるため、各生徒が最も好む応募先を選んだ結果、学校 A への需要は $D_A(p) = \{1\}$ 、学校 B への需要は $D_B(p) = \{2, 3\}$ となる。

生徒	通過 (A)	通過 (B)	応募先 (最も好む通過校)
1	○	×	A
2	×	○	B
3	×	○	B
4	×	×	\emptyset

次に、この需要が実現可能かを確認する。学校 A の需要 $|D_A(p)| = 1$ は定員 $c_A = 1$ の範囲内であり、学校 B の需要 $|D_B(p)| = 2$ も定員 $c_B = 2$ の範囲内である。両校ともに需要が定員を超えていないため、この状態は実現可能である。したがって、このカットオフ $p = (4, 3)$ は、カットオフ調整関数 T を適用しても変化しない不動点 ($T(p) = p$) となっている。

この不動点に対応する最終的な割り当て (マッチング) は、 $\mu(1) = A, \mu(2) = B, \mu(3) = B, \mu(4) = \emptyset$ と決定される。この割り当ては、実現可能性 (各校の定員が守られている)、個人合理性 (割り当てられた生徒は、どこにも行かないよりはその学校を好む)、そして公平性 (誰も正当な嫉妬 (justified envy) を抱かない) という、望ましい3つの性質を全て満たしている。

例2：不動点でないカットオフ ($T(p) \neq p$) 次に、カットオフが $p = (p_A, p_B) = (2, 2)$ の場合を考察する。この設定は、学校 A と B が、ともにそれぞれの優先順位リストの上位3名までを通過させる状況を意味する。この結果、生徒1, 2, 3は両校のカットオフを通過し、生徒4は B のカットオフのみを通過する。各生徒が通過可能な学校の中から最も好む応募先を選択するため、学校 A への需要は $D_A(p) = \{1\}$ 、学校 B への需要は $D_B(p) = \{2, 3, 4\}$ となる。

生徒	通過 (A)	通過 (B)	応募先 (最も好む通過校)
1	○	○	A
2	○	○	B
3	○	○	B
4	×	○	B

この需要が実現可能かを確認すると、学校 A の需要 $|D_A(p)| = 1$ は定員 $c_A = 1$ 以内で実現可能である。しかし、学校 B への需要 $|D_B(p)| = 3$ は定員 $c_B = 2$ を超過しており、実現不可能である。このように、少なくとも一つの学校で需要が定員を超過したため、カットオフ調整関数 T は状態を更新する必要がある。具体的には、 $T(p) = (2, 3)$ となり、これは元の $p = (2, 2)$ とは異なる。したがって、このカットオフは不動点ではない。

不動点でない場合の性質について Kamada and Kojima (2024) の定理 1 によれば、カットオフ・プロフィール p がカットオフ調整写像 T の不動点であるとき、その対応するマッチング μ_p は実現可能性・個人合理性・公平性の三条件をすべて満たす。では不動点でない場合にはどうかというと、需要集合 $D_s(p)$ の定義上、各生徒は常に「通過できる学校の中で最も好む学校」に応募するため、 μ_p は不動点か否かにかかわらず個人合理性を満たす。また、公平性（正当化された嫉妬の不在）についても、定理の証明で示されているように、 $D_s(p)$ の構成そのものが嫉妬を生じさせない仕組みになっているため、不動点でなくとも保持される。したがって、不動点でない場合に崩れ得るのは実現可能性のみであり、具体的には定員超過などによって $D_s(p) \notin F_s$ となる学校が存在し、制約違反が生じることになる。結論として、この枠組みにおいては「不動点でないから個人合理性や公平性が壊れる」という例は存在せず、壊れる可能性があるのは実現可能性のみである。

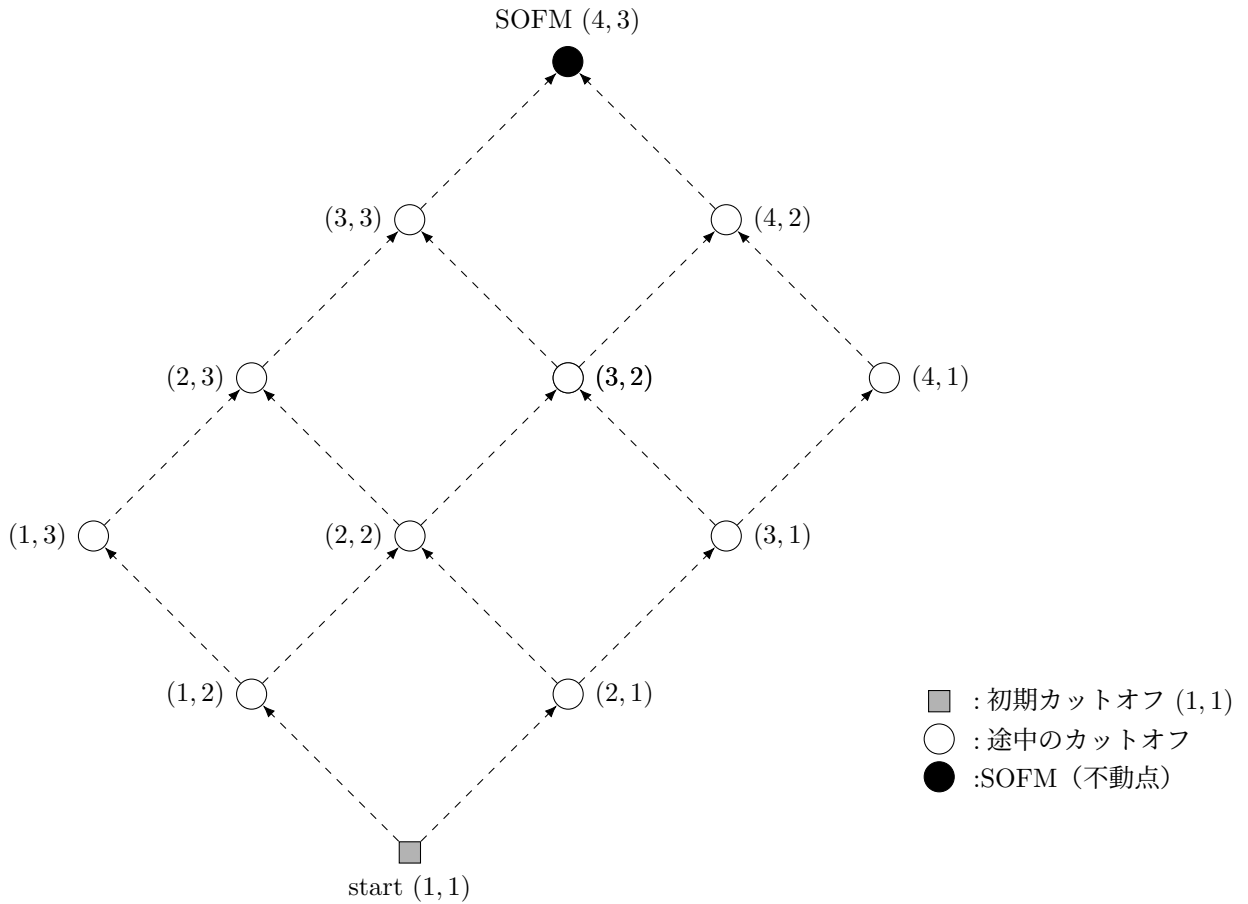
半順序集合 (X, \succeq) において、任意の $x, y \in X$ に対して、上限 $\sup_{\succeq} \{x, y\}$ と下限 $\inf_{\succeq} \{x, y\}$ が常に存在する時、この半順序集合を **束 (Lattice)** と呼ぶ。これは、集合 X の中からどの 2 つの元 (要素) を選んでも、その 2 つを「上から押さえる」ことができる元の中で最小のもの（上限）と、「下から支える」ことができる元の中で最大のもの（下限）が、必ずその集合 X の中に見つかる、という性質を表している。

半順序集合 (X, \succeq) において、**空集合ではない** 任意の部分集合 $Y \subseteq X$ に対して、上限 $\sup_{\succeq} Y$ と下限 $\inf_{\succeq} Y$ が常に存在する時、この半順序集合を **完備束 (Complete Lattice)** と呼ぶ。これは、束の性質をさらに強力にしたものであり、2 つの元だけでなく、どのような部分集合 (元の集まり) を持ってきても、その集合全体に対する上限と下限が必ず集合 X の中に存在する、ということを意味する。有限集合だけでなく、無限個の元からなる部分集合についてもこの条件が成り立つ。

定理. (L, \leq) を完備束とし、 $f: L \rightarrow L$ を増加関数、すなわち、 $x \leq y$ ならば $f(x) \leq f(y)$ が成り立つとする。このとき、 f の不動点の集合 $\{u \in L : f(u) = u\}$ は \leq の下で完備束

をなす。特に、 f は最小不動点 \underline{u} と最大不動点 \bar{u} を持つ。²

カットオフ遷移説明 以下図は、先述の、不動点になるカットオフ値とそうでないカットオフ値について例で比較した際の、カットオフ調整アルゴリズムの進行を縦長の菱形として表したものである。最下段の■が初期値 $(1, 1)$ を示し、そこから需要の不一致に応じて各学校のカットオフが一段階ずつ引き上げられ、○で表されたさまざまな中間のカットオフ候補へと枝分かれしていく。各○は不動点とは限らず、さらに需要に応じて矢印に沿って上流へと進む。やがてすべての経路は最上段の●に収束し、そこが生徒最適公平マッチング (SOFM) に対応する不動点 $(4, 3)$ である。この図は、初期カットオフから始めると最終的に SOFM に至ること、そしてその過程で複数の中間候補を経由しうることを直感的に示している。



定理 2. 各学校における制約が一般的な上限 (general upper-bound) であるならば、SOFM は存在する。

主張 1. 写像 T は最小不動点 (smallest fixed point) を持つ。すなわち、 $T(p) = p$ を満たし、かつ $T(p') = p'$ を満たすすべての $p' \in P$ に対して $p \leq p'$ となるような $p \in P$ が存在する。

²<https://pauldelatte.github.io/files/L3.pdf> より

説明 各学校のマッチングに関する制約が「一般上限 (general upper-bound)」という性質を持つ場合、必ず「学生最適で公正なマッチング (SOFM)」が存在することを証明するものである。ここでいう「一般上限」とは、ある学生の集合の受け入れが実現可能であるならば、その任意の部分集合も同様に受け入れ可能であるという条件である。SOFM は、実行可能性、個人合理性、そして「正当な嫉妬」がないという公正性の3つの条件を満たす全てのマッチングの中で、全ての学生にとって最も望ましい（あるいはそれ以上に良い結果はない）マッチングのことである。

この定理の証明における最初の重要なステップが主張1である。「カットオフ調整関数 T 」が最小の不動点（関数を適用しても値が変わらない点のうち、最も小さいもの）を持つことを主張するものである。この主張は、関数 T が特定の順序関係を保つ「弱増加関数」であることを示し、タルスキの不動点定理を適用することで証明される。この主張1によって存在が保証される「最小の不動点」が、実は SOFM に対応するマッチングを導き出す鍵となる。したがって、主張1は、SOFM の存在を保証する定理2の証明全体の土台となる重要な補題である。

これらのモデルでの実現可能性は、全ての学校 $s \in S$ について、 $p_s = |I + 1|$ となる場合も許容している。これは、全ての学生 $i \in I$ がどの学校にも通過できないことを意味する。この場合、需要集合 $D_s(p)$ は空集合となり、各学校の制約を満たすため、実現可能性が保たれる。したがって、全ての学生がどこにも割り当てられないマッチングも実現可能なマッチングの一つとして含まれる。これは、現職必置条件を満たさない。そこで本稿では、公平性を弱め、教科公平性を満たすマッチングに着目する。

2.2 仮定

本モデルでは、以下の3つの重要な仮定を導入する。

証明とかで使っている場合は、仮定の番号を変更する

仮定 (1)

任意の学校 $s \in S$ 、現職教師 $i \in I_\alpha$ 、現職教師 $j \in I \setminus I_\alpha$ について、 $[i \succ_s \emptyset \text{ かつ } j \succ_s \emptyset] \implies i \succ_s j$ とする。これは、もし両者がその学校にとって受け入れ可能であるならば、学校は現職教師を優先しなければならないということである。

仮定 (2)

(i) すべての $s \in S$ で $\mu_s \in \mathcal{F}_s$ 、かつ (ii) すべての $i \in I_\alpha$ に対して $i \in \mu_s$ となる学校 $s \in S$ が存在する、という条件を満たすマッチング μ が存在するとする。これは、すべての現職教員を雇用する、実現可能なマッチングが少なくとも一つは存在するということである。

仮定 (3)

すべての $i \in I_\alpha$ とすべての $s \in S$ について、 $s \succ_i \emptyset$ が成り立つとする。これは、すべて

の現職教師は、いかなる学校も受け入れ可能な割り当て先であると見なすということである。

本稿の目的は、下記の定義2で述べる「教師にとって最も望ましい教科公平なマッチング」を見つけることである。

定義 2. マッチング μ が**教科別教師最適公平マッチング (subject-TOFM)** となるのは、以下の条件を満たす場合である。

- (i) μ は、実現可能、個人合理的、かつ教科公平であり、かつ
- (ii) 実現可能、個人合理的、かつ教科公平である、他のいかなるマッチング μ' に対しても、すべての教師 $i \in I$ について $\mu_i \succeq_i \mu'_i$ が成り立つ。

ここから 動画は 00:36:30 から

このモデルの構造は、教科ごとの分析を可能にする。ある教科 $j \in J$ について、その教科の市場に特有の嫉妬や公平性を定義できる。**教科 j における教科に基づいた正当な嫉妬** とは、同じ教科 j を持つ2人の教師間での正当な嫉妬をいう。また、**教科 j において教科公平である** とは、教科 j において、教科に基づいた正当な嫉妬を持つ教師がいない状態をいう。**教科 j において現職必置条件を満たす** とは、 $\forall i \in I_\alpha \cap I_j, \mu_i \neq \emptyset$ となることをいい、その教科を持つ全ての現職教師が雇用されるマッチングのことである。

解を見つけるために、カットオフに基づくメカニズムを利用する。まず、カットオフプロファイルの集合 $P := \{1, \dots, |I|, |I| + 1\}^S$ を考える。この集合には、すべての $s \in S$ に対して p_s が p'_s 以下であるとき、かつそのときに限り $p \leq p'$ となる半順序 (partial order) \leq が与えられている。この空間は有限束 (したがって完備束 (complete) でもある。) である。

各学校 s について、 $i^{(s,l)}$ を、 s の優先順位に従って下から l 番目の学生とする (例えば、 s にとって最も順位の高い学生は $i^{(s,|I|)}$ であり、最も低い学生は $i^{(s,1)}$ である)。また、すべての $s \in S$ に対して $i^* = i^{(s,|I|+1)}$ となるような架空の学生 $i^* \in I$ を考え、各 $s \in S$ について選好 \succ_s の定義域を、任意の $i \in I$ に対して $i^* \succ_s i$ が成立するように拡張する。

教科 $j \in J$ におけるカットオフプロファイル $p_j \in P$ が与えられたとき、各学校 $s \in S$ と教科 $j \in J$ における「需要」を次のように定義する。

$$D_s^j(p_j) = \{i \in I_j \mid i \succeq_s i^{(s,p_s^j)} \text{ and } s \succ_i \emptyset; \forall s' \in S_j, i \succeq_{s'} i^{(s',p_{s'}^j)} \implies s \succeq_i s'\}$$

各教科 j について、与えられた優先順位カットオフのベクトル p_j における学校 s の需要 $D_s^j(p_j)$ とは、 I_j に属する教師の集合であり、その教師は学校 s でカットオフ p_s^j 以上に順位付けられ、かつ、自身が条件を満たす他のどの学校よりも学校 s を好む。

アルゴリズムの中核は、これらのカットオフを繰り返し調整する**教科別カットオフ調整関数** $T : P \rightarrow P$ である。各学校 s と教科 j について、この関数は次のように定義される。

$$T_s^j(p) = \begin{cases} p_s^j + 1 & \text{if } |D_s^j(p)| > c_s^j \\ p_s^j & \text{if } |D_s^j(p)| \leq c_s^j \end{cases}$$

2.3 結果と考察

定理 1. 教科制約の下で、教科別教師最適公平マッチング (*subject-TOFM*) は常に現職必置条件を満たす。

証明. Kamada & Kojima(2024) によれば、各教科 j において、以下の条件を満たす教師最適公平マッチング (TOFM) μ^j が存在する。

- (i) 個人合理性 (I.R.) : $\forall i \in I_j, \mu_i^j \succ_i \emptyset$,
- (ii) 公平性 (fair) : $\nexists i, i' \in I_j, \nexists s \in S_j \text{ s.t. } s \succ_i \mu_i^j, i' \in \mu_s^j, i \succ_s i'$,
- (iii) 実現可能性 (feasible) : $\forall s \in S_j, \mu_s^j \in \mathcal{F}_s^j$,
- (iv) 教師最適性 (T.O.) : $\mu_i^j \succeq_i \bar{\mu}_i^j$ (任意の $i \in I_j$ と、教科 j で実現可能、個人合理的、かつ公平な任意の $\bar{\mu}^j$ に対して)

定理 1 より、 μ^j は教科 j において現職必置条件を満たす。ここで、 $\forall i \in I_j$ に対して $\mu_i = \mu_i^j$ 、かつ、 $\forall s \in S$ に対して $\mu_s = \bigcup_{j \in A(s)} \mu_s^j$ となるようなマッチング μ を構成する。

(μ が *subject-TOFM* であることを示す) (i) を示すために、まず μ が実現可能であることを示す。任意の $s \in S$ と任意の $j \in J$ をとる。

- **ケース 1:** $j \in A(s)$ の場合。 $\mu_s^j \in \mathcal{F}_s^j$ である。 μ の定義より $\{i \in I_j : i \in \mu_s^j\} = \{i \in I_j : i \in \mu_s\}$ 。 $\mu_s^j \in \mathcal{F}_s^j$ であるから、 $|\{i \in I_j : i \in \mu_s^j\}| = |\{i \in I_j : i \in \mu_s\}| \leq c_s^j$ 。
- **ケース 2:** $j \notin A(s)$ の場合。このとき、 $c_s^j = 0$ である。 $|\{i \in I_j : i \in \mu_s\}| = 0 = c_s^j$ 。

したがって、 $\mu_s \in \mathcal{F}_s$ である。(※)

次に、 μ が個人合理的であることを示す。任意の $i \in I$ をとると、ある $j \in J$ が存在し、 $i \in I_j$ となる。 μ^j は個人合理的であるから、 $\mu_i = \mu_i^j \succeq_i \emptyset$ 。

次に、 μ が教科公平であることを示す。 $j \equiv A(i) = A(i')$ となる任意の $i, i' \in I$ をとる。背理法により、ある $s \in S$ が存在し、 $s \succ_i \mu_i, i' \in \mu_s, i \succ_s i'$ が成り立つと仮定する。 $i' \in \mu_s$ であるから、 μ の定義より $s \in S_j$ である。仮定より、 $s \succ_i \mu_i^j, i' \in \mu_s^j, i \succ_s i'$ となる。これは μ^j が TOFM であること (条件 (ii) 公平性) に矛盾する。したがって、 μ は教科公平である。

(ii) 教師最適性を示すために、任意の $i \in I$ と、実現可能、個人合理的、かつ教科公平である任意の μ' をとる。 $j \equiv A(i)$ とする。 μ^j の定義より、 μ^j は教科 j における TOFM であり、条件 (iv) を満たす。ここで、 $\forall i' \in I_j$ に対して $\bar{\mu}_{i'}^j = \mu_{i'}^j$ 、 $\forall s \in S_j$ に対して $\bar{\mu}_s^j = \{i' \in I_j : i' \in \mu_s^j\}$ となるような $\bar{\mu}^j$ を構成する。

この $\bar{\mu}^j$ が教科 j で実現可能、個人合理的、かつ公平であることを示す。

($\bar{\mu}^j$ が教科 j で実現可能であることを示す) 任意の $s \in S_j$ をとる。 μ' は実現可能なので $\mu'_s \in \mathcal{F}_s$ である。 $\mu'_s \in \mathcal{F}_s$ であるから、任意の $k \in J$ について $|\{i' \in I_k : i' \in \mu'_s\}| \leq c_s^k$ が成り立つ。 $j \in J$ なので、特に $|\{i \in I_j : i \in \mu'_s\}| \leq c_s^j$ である。 $\bar{\mu}^j$ の定義より、 $\bar{\mu}_s^j = \{i' \in I_j : i' \in \mu'_s\}$ なので、 $|\bar{\mu}_s^j| = |\{i' \in I_j : i' \in \mu'_s\}| \leq c_s^j$ となる。したがって、 $\bar{\mu}_s^j \in \mathcal{F}_s^j$ であり、 $\bar{\mu}^j$ は教科 j で実現可能である。

任意の $i \in I_j$ をとる。前提より、マッチング μ' は個人合理的であるから、 $\mu'_i \succ_i \emptyset$ が成り立つ。 $\bar{\mu}^j$ の定義によれば $\bar{\mu}_i^j = \mu'_i$ であるため、 $\bar{\mu}_i^j \succ_i \emptyset$ もまた真である。したがって、 $\bar{\mu}^j$ は教科 j で個人合理的である。

($\bar{\mu}^j$ が教科 j で公平であることを示す) 任意の $i', i'' \in I_j$ をとる。このとき $A(i') = A(i'') = j$ である。背理法により、ある $s \in S_j$ が存在し、 $s \succ_{i'} \bar{\mu}_{i'}^j$, $i'' \in \bar{\mu}_s^j$, かつ $i' \succ_s i''$ が成り立つと仮定する。

しかし、前提としてマッチング μ' は教科公平である。これは、 $A(i') = A(i'')$ であることから、 $s \succ_{i'} \mu'_{i'}$, $i'' \in \mu'_s$, かつ $i' \succ_s i''$ となるような学校 $s \in S$ が存在しないことを意味する。 $\bar{\mu}^j$ の定義 ($\bar{\mu}_{i'}^j = \mu'_{i'}$, $\bar{\mu}_s^j = \{k \in I_j \mid k \in \mu'_s\}$) を考慮すると、我々の仮定は μ' の教科公平性に直接矛盾する。したがって、 $\bar{\mu}^j$ は教科 j で公平である。

以上より、 $\bar{\mu}^j$ は教科 j において実現可能、個人合理的、かつ公平であることが示された。 μ^j は教科 j における TOFM であるから、その教師最適性の定義より、任意の $i' \in I_j$ に対して $\mu_{i'}^j \succeq_{i'} \bar{\mu}_{i'}^j$ が成り立つ。

μ と μ' の構成方法から、 $\mu_{i'} = \mu_{i'}^j$ および $\mu'_{i'} = \bar{\mu}_{i'}^j$ であるため、

$$\mu_{i'} \succeq_{i'} \mu'_{i'}$$

が導かれる。これは任意の教師について成り立つため、 μ は教科別教師最適公平マッチング (subject-TOFM) である。

(μ が現職必置条件を満たしていることを示す) (※) より μ は実現可能である。したがって、残るは全ての現職教師が割り当てを得ていること、すなわち $\forall i \in I_\alpha$ に対して $\mu_i \neq \emptyset$ であることを示せばよい。

任意の $i \in I_\alpha$ をとり、 $j \equiv A(i)$ とする。 μ^j は教科 j における TOFM であり、定理 1 より、 μ^j は教科 j において現職必置条件を満たしている。(なぜなら、 \mathcal{F}_s^j は教師集合 I_j と学校集合 S_j 間のマッチング問題におけるキャパシティ制約であるから。)

よって、 $\mu_i^j \neq \emptyset$ が成り立つ。 μ の構成方法から $\mu_i = \mu_i^j$ であるため、 $\mu_i \neq \emptyset$ となる。これは任意の $i \in I_\alpha$ について真であるため、 μ は現職必置条件を満たしている。

よって、subject-TOFM は教科制約の下で常に現職必置条件を満たしている。

□

3 拡張モデル：複数免許を持つ教員

学校選択モデルを形式的に定義する。 I を教師からなる空でない有限集合、 S を学校からなる空でない有限集合とする。各教師 $i \in I$ は、学校の集合 S とマッチしない状態 \emptyset の上で定義される厳密な選好順序 \succ_i を持つ。各学校 $s \in S$ は、教師の集合 I の上で定義される厳密な優先順位 \succ_s を持つ。すべての選好の組をプロファイル $\succ_I = (\succ_i)_{i \in I}$ とし、すべての優先順位の組をプロファイル $\succ_S = (\succ_s)_{s \in S}$ とする。

各学校 $s \in S$ について、その制約は、実現可能な教師集合の族 \mathcal{F}_s によって与えられる。教師の部分集合 $I' \subseteq I$ は、 $I' \in \mathcal{F}_s$ であるとき、学校 s において**実現可能** (feasible) であると定義される。したがって、一つの**問題** (problem) は、組 $(I, S, \succ_I, \succ_S, \{\mathcal{F}_s\}_{s \in S})$ によって特徴づけられる。

マッチング (matching) μ とは、教師を学校に割り当てる写像であり、形式的には以下の3つの条件で定義される。

- (i) すべての教師 i について、その割り当て先は $\mu_i \in S \cup \{\emptyset\}$ である。
- (ii) すべての学校 s について、そこに割り当てられた教師の集合は $\mu_s \subseteq I$ である。
- (iii) いかなる教師 i と学校 s のペアにおいても、 $\mu_i = s$ であることと $i \in \mu_s$ であることが同値であるように、割り当ては整合的でなければならない。

教師と教科の割り当て関数 A は、各教師をその教師が免許を持つ教科の空でない集合に対応付ける。

$$A: I \rightarrow 2^J \setminus \emptyset$$

ある教科 $j \in J$ に関連する教師の集合 I_j と学校の集合 S_j は、この新しい文脈の下で以前と同様に、 $I_j = \{i \in I \mid j \in A(i)\}$ および $S_j = \{s \in S \mid j \in A(s)\}$ と定義される。再配置前に教師 i が担当していた主担当教科の集合を $B(i)$ と定義し、 $|B(i)| = 1$ と仮定する。また、教師 i が免許を持つものの、以前は担当していなかった教科の集合を $C(i) = A(i) \setminus B(i)$ とする。

学校の実現可能性制約 \mathcal{F}_s は、大きく異なる。教師の集合 μ_s が学校 s にとって実現可能であるとは、受け入れられた各教師をその教師が免許を持つ教科のいずれか一つに割り当てることで、学校の教科ごとのキャパシティを満たすような方法が存在する場合をいう。これは、各教師 $i \in \mu_s$ に対して $J_s(i) \in A(i)$ を満たす**教科割り当て関数** (subject assignment function) $J_s: \mu_s \rightarrow J$ に依存する。形式的な制約は以下の通りである。

$$\mathcal{F}_s = \{\mu_s \subseteq I : \exists J_s: \mu_s \rightarrow J \text{ s.t. } \forall j \in J, |\{i \in \mu_s : J_s(i) = j\}| \leq c_s^j\}$$

マッチング μ の質は、いくつかの重要な特性によって評価される。マッチングが**実現可能** (feasible) であるとは、すべての $s \in S$ について $\mu_s \in \mathcal{F}_s$ が成り立つことである。**個人合理的** (individually rational) であるとは、すべての $i \in I$ について $\mu_i \succ_i \emptyset$ が成り

立つことである。ある教師 i が教師 i' に対して**正当化された嫉妬を持つ** (have justified envy toward) とは、 $s \succ_i \mu_i$ 、 $i' \in \mu_s$ 、かつ $i \succ_s i'$ となるような学校 $s \in S$ が存在する場合をいう。したがって、マッチング μ が**公平** (fair) であるとは、別の教師に対して正当化された嫉妬を持つ教師が一人もないことである。最後に、マッチング μ が**効率的** (non-wasteful) とは、 $s \succ_i \mu_i$ かつ $\mu_s \cup \{i\} \in \mathcal{F}_s$ となるようなペア $(i, s) \in I \times S$ が存在しないことである。マッチング μ は、実現可能、個人合理的、公平、かつ効率的という性質を同時に満たすとき、**安定** (stable) であると定義される。マッチング μ が**現職必置条件** (in-service teacher condition) を満たすとは、この集合の全ての教師が割り当てを得ること、すなわち $\forall i \in I_\alpha, \mu_i \neq \emptyset$ が成り立つ場合をいう。

公平性の概念は、この新しい設定に合わせて調整される。ある教師 i が教師 i' に対して**弱い教科に基づいた正当な嫉妬** (weak subject justified envy) を持つとは、教師 i が教えることのできる教科の集合が教師 i' のそれ以上であり（すなわち、 $A(s) \cap A(i') \subset A(s) \cap A(i)$ ）、かつ標準的な正当な嫉妬の条件が満たされる（ $\exists s \in S$ s.t. $s \succ_i \mu_i, i' \in \mu_s, i \succ_s i'$ ）場合をいう。マッチングが**弱い教科公平** (weak subject-fair) であるとは、他の教師に対して弱い教科に基づいた正当な嫉妬を持つ教師が誰もいない状態を指す。

さらに、マッチングが**教科 j において現職必置条件を満たす** (α -feasible on j) であるとは、複数教科制約の下で実現可能であり、かつ、教科 j の免許を持つ全ての現職教師が雇用されている（すなわち、 $\forall i \in I_\alpha \cap I_j, \mu_i \neq \emptyset$ ）場合をいう。

定義 1.(再掲) 制約 \mathcal{F}_s は、 $I' \in \mathcal{F}_s$ かつ $I'' \subseteq I'$ ならば常に $I'' \in \mathcal{F}_s$ が成り立つとき、**一般上限** (general upper-bound) である。

定義 2.(再掲) マッチング μ は、以下の2つの条件を満たすとき、**教師最適公平マッチング (TOFM)** (teacher-optimal fair matching) となる。

- (i) μ は、実現可能、個人合理的、かつ公平であり、かつ
- (ii) 実現可能、個人合理的、かつ公平である、他のいかなるマッチング μ' に対しても、すべての教師 $i \in I$ について $\mu_i \succeq_i \mu'_i$ が成り立つ。

カットオフ調整アルゴリズムを、複数教科のケースを扱えるように拡張する。学校 s の教科 j における需要関数 $D_s^j(p)$ は、教師が持つ全ての免許教科にわたる他の選択肢 (alternative opportunities) を考慮するように再定義される。教師 $i \in I_j$ がこの需要集合に含まれるのは、その教師が学校 s の教科 j におけるカットオフを上回り、かつ、自身が条件を満たす他のいかなる割り当て候補となる学校 s' の科目 j' よりも学校 s での職を好む場合である。

$$D_s^j(p) = \{i \in I_j \mid i \succeq_s i^{(s,p_s^j)} \text{ かつ } s \succ_i \emptyset \text{ であり、} \\ \forall s' \in S \setminus \{s\}, \forall j' \in A(i) \cap A(s'), i \succeq_{s'} i^{(s',p_{s'}^{j'})} \implies s \succ_i s'\}$$

教科別カットオフ調整関数 $T : P \rightarrow P$ は、以前と同様に動作しますが、この新しい需要関数に対して適用される。

$$T_s^j(p) = \begin{cases} p_s^j + 1 & \text{if } |D_s^j(p)| > c_s^j \\ p_s^j & \text{if } |D_s^j(p)| \leq c_s^j \end{cases}$$

もし p がこの関数 T の不動点 (fixed point) であるならば、その結果として得られる需要のある教師の集合は、各学校にとって実現可能となる。すなわち、 $\bigcup_{j \in A(s)} D_s^j(p) \in \mathcal{F}_s$ である。この不動点から最終的なマッチング μ^p を構成することができる。これは、各学校に対して、その学校が募集するすべての教科にわたる需要のある教師の和集合を割り当てることで行われる。

$$\mu_s^p = \bigcup_{j \in A(s)} D_s^j(p)$$

3.1 仮定

本モデルでは、以下の4つの重要な仮定を導入する。

証明とかで使っている場合は、仮定の番号を変更する

仮定 (1)

任意の学校 $s \in S$ 、現職教師 $i \in I_\alpha$ 、現職教師 $j \in I \setminus I_\alpha$ について、 $[i \succ_s \emptyset \text{ かつ } j \succ_s \emptyset] \implies i \succ_s j$ とする。これは、もし両者がその学校にとって受け入れ可能であるならば、学校は現職教師を優先しなければならないということである。

仮定 (2)' 後述する例1で浮き彫りになった問題に対処するため、主担当教科に基づいて現職教師を優先する、さらなる仮定を導入する。この仮定は、以前の仮定 (2) を置き換えるものである。以下の条件を満たすマッチング μ が存在するとする。

1. $\forall s \in S, \mu_s \in \mathcal{F}_s$ 。
2. $\forall i \in I_\alpha$ について、 i がその主担当教科 $j = B(i)$ を教えるために学校 s に割り当てられるような、 $s \in S$ が存在する。

すなわち、全ての現職教師が自身の主担当教科の職に割り当てられるような、実現可能なマッチングが少なくとも一つは存在すると仮定する。

仮定 (3)

すべての $i \in I_\alpha$ とすべての $s \in S$ について、 $s \succ_i \emptyset$ が成り立つとする。これは、すべての現職教師は、いかなる学校も受け入れ可能な割り当て先であると見なすということである。

仮定 (4) 任意の学校 $s \in S$ と、その学校が募集する任意の教科 $j \in A(s)$ について、

$$\forall s \in S, \forall i, i' \in I, \forall j \in A(s), \text{ もし } B(i) = \{j\} \text{ かつ } j \in C(i'), \text{ ならば } i \succ_s^j i'.$$

が成り立つとする。なお、ここでは、 \succ_s^j は、教科 j の資格を持つ教師に対する学校 s の選好を表すものとする。

これは、学校は、主担当教科が j である教師を、 j が主担当科目でない教師よりも優先する。

3.2 結果と考察

定理 2. もしカットオフのプロファイル $p \in P$ が関数 T の不動点であるならば、それによって定まるマッチング μ^p は弱い教科公平 (*weak subject-fair*) である。

証明. カットオフのプロファイル $p \in P$ が T の不動点であると仮定する。背理法により、 μ^p が弱い教科公平でないと仮定する。このとき、 $A(s) \cap A(i') \subset A(s) \cap A(i)$ かつ $s \succ_i \mu_i^p$, $i' \in \mu_s^p$, $i \succ_s i'$ を満たすような教師 $i, i' \in I$ と学校 $s \in S$ が存在する。 $i' \in \mu_s^p$ であるから、 μ_s^p の定義より、 $i' \in D_s^j(p)$ かつ $j \in A(i')$ となるような教科 $j \in A(s)$ が存在する。 $i' \in D_s^j(p)$ であるから、 $i' \preceq_s i^{(s, p_s^j)}$ が成り立つ。一方、 $A(s) \cap A(i') \subset A(s) \cap A(i)$ かつ $j \in A(s) \cap A(i')$ であることから、 $j \in A(s) \cap A(i)$ である。すなわち、 $j \in A(i)$ となる。 $i \succ_s i'$ かつ $i' \preceq_s i^{(s, p_s^j)}$ であるから、優先順位の推移性より $i \succ_s i^{(s, p_s^j)}$ が成り立つ。

まず、 $\mu_i^p = \emptyset$ のケースを考える。このとき、 i は需要集合 $D_s^j(p)$ には含まれない。前段の議論から i は学校 s の科目 j でのカットオフは満たしているので、 $i \notin D_s^j(p)$ となる理由は、 i が s よりも厳密に好む別の選択肢が存在するためでなければならない。すなわち、 $i \preceq_{s'} i^{(s', p_{s'}^{j'})}$ かつ $s' \succ_i s$ となるような、別の学校 s' の科目 j' (ただし $s' \in S \setminus \{s\}, j' \in A(i) \cap A(s')$) が存在する。しかし、前提より $\mu_i^p = \emptyset$ であるから、 i は最終的に s' にも割り当てられないため、 $i \notin D_{s'}^{j'}(p)$ でもある。したがって、この論法を繰り返すと、 $s'' \succ_i s'$ となる、さらに好ましい学校 s'' が存在することになる。この手続きは無限の選好サイクル ($\dots \succ_i s'' \succ_i s' \succ_i s$) を示唆するが、これは学校 S と教科 J の集合が有限であるという事実と矛盾する。

次に、 $\mu_i^p \neq \emptyset$ のケースを考える。教師 i の割り当て先を $s' \equiv \mu_i^p$ とおく。このとき、定義より $i \in \mu_{s'}^p$ となる。したがって、 $\mu_{s'}^p$ の定義から、ある教科 $j' \in A(s')$ について $i \in D_{s'}^{j'}(p)$ となる。我々は元々、教師 i が学校 s において嫉妬を持つ状況を考えており、 $s \neq s'$ である。前段の議論から、 $j \in A(i) \cap A(s)$ かつ $i \preceq_s i^{(s, p_s^j)}$ が成立している。 $i \in D_{s'}^{j'}(p)$ であ

ることの定義は、 i がカットオフを満たす他のいかなる学校（この場合は s ）よりも s' を好むことを要求する。よって、 $\mu_i^p = s' \succ_i s$ でなければならない。しかし、これは元々の弱い教科に基づいた嫉妬の仮定である $s \succ_i \mu_i^p = s'$ と矛盾する。□

例 1.(仮定 (3)', 仮定 (5) を仮定しない場合に現職必置条件を保証できない例) 教師の集合を $I = \{1, 2, 3, 4\}$ 、学校の集合を $S = \{5, 6\}$ とし、現職教師の集合を $I_\alpha = \{1, 2, 3\}$ とする。

選好は以下の通りである。

- 全ての教師 $i \in I$ について、 $\succ_i: 6 \succ 5 \succ \emptyset$ 。
- 全ての学校 $s \in S$ について、 $\succ_s: 1 \succ 2 \succ 3 \succ 4 \succ \emptyset$ 。

教師の免許教科 ($A(i)$) と学校の募集教科 ($A(s)$) は以下の通りである。

- $A(1) = \{\text{英語, 数学}\}$
- $A(2) = \{\text{英語, 数学}\}$
- $A(3) = \{\text{数学}\}$
- $A(4) = \{\text{英語}\}$
- $A(5) = \{\text{英語, 数学}\}$
- $A(6) = \{\text{英語}\}$

最後に、教科ごとのキャパシティは $c_5^{\text{英語}} = 2$ および $c_5^{\text{数学}} = 1$ である。

この設定では、アルゴリズムの一つの結果として、 $\mu_5 = \{2\}$ および $\mu_6 = \{1\}$ といったマッチングが生じうる。この場合、現職教師である教師 3 ($3 \in I_\alpha$) は、職を得られないままとなる。これは、現職必置条件を満たすマッチングの存在が保証されないことを示している。

定理 3. マッチング μ^p が現職必置条件を満たすような、関数 T の不動点 p が存在する。

証明. $\hat{I} \equiv I_\alpha$ とおく。全ての $i \in \hat{I}$ について、 $\hat{A}(i) \equiv B(i)$ とする。すなわち、全ての $i \in \hat{I}$ について $|\hat{A}(i)| = 1$ である。ここでは、 \hat{I} と S の間のマッチング μ を考える。このとき、実現可能性制約を次のように定義する。

$$\hat{\mathcal{F}}_s = \{\mu_s \subset \hat{I} : \forall j \in J, |\{i \in \mu_s : \hat{A}(i) = \{j\}\}| \leq c_s^j\}$$

複数教科制約であるから、(仮定 1) は満たされる。 $I \setminus I_\alpha = \emptyset$ であるから、(仮定 2) も満たされる。元の問題 $(I, S, \succ_I, \succ_S, \mathcal{F}_s)$ における (仮定 3) より、(i) と (ii) を満たすマッチング μ が存在する。ここで、全ての $i \in \hat{I}$ について $\hat{\mu}_i = \mu_i$ となるように、 $\hat{\mu}$ を定義

する。(仮定3)'より、 $\hat{\mu}_s \in \hat{\mathcal{F}}_s$ であり、かつ全ての $i \in \hat{I}$ についてある $s \in S$ が存在して $i \in \hat{\mu}_s$ となる。したがって、 $\hat{\mu}$ は(元の) 仮定(3)を満たす。元の問題 $(I, S, \succ_I, \succ_S, \mathcal{F}_S)$ における(仮定4)より、全ての $i \in I_\alpha (= \hat{I})$ と全ての $s \in S$ について、 $s \succ_i \emptyset$ である。以上より、(このサブ問題において) 仮定(1) から(4) は全て満たされる。

$|\hat{A}(i)| = 1$ という条件と $\hat{\mathcal{F}}_s$ の構成方法から、この制約は教科制約 (subject constraint) である。この制約が教科制約であることから、定理2より、問題 $(\hat{I}, S, \succ_{\hat{I}}, \succ_S, \hat{\mathcal{F}}_S)$ において、で現職必置条件を満たすような教科別教師最適公平マッチング (subject-TOFM) $\hat{\mu}$ が存在する。

$\hat{i}^{(s,j,l)}$ を、学校 s の優先順位 \succ_s に従って並べたときに、集合 $\{i\}_{i \in \hat{I}_j}$ の中で l 番目に順位の低い教師とする。任意の $s \in S$ と $j \in J$ をとる。

$$p_{(s,j)}^* = \begin{cases} \min\{l \mid \hat{i}^{(s,j,l)} \in \hat{\mu}_s^j\} & \text{if } \hat{\mu}_s^j \neq \emptyset, \\ |\hat{I}_j| + 1 & \text{if } \hat{\mu}_s^j = \emptyset. \end{cases}$$

需要集合を次のように定義する。

$$\begin{aligned} \hat{D}_s^j(p_j^*) &= \{i \in I_j \mid i \succeq_s i^{(s,j,p_{(s,j)}^*)} \text{ かつ } s \succ_i \emptyset; \\ &\quad \text{かつ } \forall s' \in S_j, i \succeq_{s'} i^{(s',j,p_{(s',j)}^*)} \implies s \succeq_i s'\} \end{aligned}$$

$\hat{\mu} = \hat{\mu}^{p^*}$ を示す (すなわち、全ての $s \in S, j \in J$ について、 $\hat{\mu}_s^j = \hat{\mu}_{(s,j)}^{p_j^*} = \hat{D}_s^j(p_j^*)$ であることを示す)

$\hat{\mu}_s^j \subseteq \hat{D}_s^j(p_j^*)$ を示す 任意の $i \in \hat{\mu}_s^j$ をとる。 $i = \hat{i}^{(s,j,l)}$ となるような l を考える。 $i \in \hat{\mu}_s^j$ ということと、 $p_{(s,j)}^*$ の定義から、 $i = \hat{i}^{(s,j,l)} \succeq_s \hat{i}^{(s,j,p_{(s,j)}^*)}$ が成り立つ。ここで、背理法により、 $i \succeq_{s'} \hat{i}^{(s',j,p_{(s',j)}^*)}$ かつ $s' \succ_i s = \hat{\mu}_i$ となるような $s' \in S_j$ が存在すると仮定する。このとき、 $s' \succ_i \hat{\mu}_i$ である。 $p_{(s',j)}^*$ の定義から、カットオフランクの教師はマッチングに含まれるため、 $\hat{i}^{(s',j,p_{(s',j)}^*)} \in \hat{\mu}_{s'}^j$ である。この状況は、教師 i が学校 s' において、そこに割り当てられている教師 $\hat{i}^{(s',j,p_{(s',j)}^*)}$ に対して正当化された嫉妬を持つことを意味し、これは $\hat{\mu}$ が教科公平 (subject-fair) であるという事実と矛盾する。したがって、背理法の仮定は偽であり、全ての $s' \in S_j$ について、 $i \succeq_{s'} \hat{i}^{(s',j,p_{(s',j)}^*)}$ ならば $s \succeq_i s'$ でなければならない。 $\hat{\mu}$ は個人合理的 (I.R.) であるから、 $\hat{\mu}_i = s \succ_i \emptyset$ である。以上より、 $i \succeq_s \hat{i}^{(s,j,p_{(s,j)}^*)}$ 、 $s \succ_i \emptyset$ 、そして「全ての $s' \in S_j$ について $i \succeq_{s'} \hat{i}^{(s',j,p_{(s',j)}^*)} \implies s \succeq_i s'$ 」が全て成立するため、 $i \in \hat{D}_s^j(p_j^*)$ である。

$\hat{\mu}_s^j \supseteq \hat{D}_s^j(p_j^*)$ を示す 任意の $i \in \hat{D}_s^j(p_j^*)$ をとる。背理法により、 $i \notin \hat{\mu}_s^j$ と仮定する。 $i \in \hat{D}_s^j(p_j^*)$ であるから、定義より $i \succeq_s \hat{i}^{(s,j,p_{(s,j)}^*)}$ であり、かつ $\hat{i}^{(s,j,p_{(s,j)}^*)} \in \hat{\mu}_s^j$ である。背理法の仮定 $i \notin \hat{\mu}_s^j$ より、 $i \neq \hat{i}^{(s,j,p_{(s,j)}^*)}$ であるため、優先順位の関係は厳密になり、 $i \succ_s \hat{i}^{(s,j,p_{(s,j)}^*)}$ となる。 $\hat{\mu}$ は現職必置条件を満たすため i はどこかに割り当てられるはず

なので、その学校を $s' = \hat{\mu}_i$ とする。仮定より $s \neq s'$ である。 $i = \hat{i}^{(s',j,l)}$ となるような l を考える。 $i \in \hat{\mu}_{s'}^j$ ということと、 $p_{(s',j)}^*$ の定義から、 $i = \hat{i}^{(s',j,l)} \succeq_{s'} \hat{i}^{(s',j,p_{(s',j)}^*)}$ が成り立つ。一方、 $i \in \hat{D}_s^j(p_j^*)$ であるから、その定義より、「 $i \succeq_{s'} \hat{i}^{(s',j,p_{(s',j)}^*)}$ 」ならば $s \succeq_i s'$ でなければならない。 $s \neq s'$ であることから、これは $s \succ_i s'$ を意味する。これらをまとめると、 $s \succ_i s' = \hat{\mu}_i$, $\hat{i}^{(s,j,p_{(s,j)}^*)} \in \hat{\mu}_s^j$, かつ $i \succ_s \hat{i}^{(s,j,p_{(s,j)}^*)}$ が成立する。これは、 $\hat{\mu}$ が教科公平であるという事実と矛盾する。したがって、最初の仮定は偽であり、 $i \in \hat{\mu}_s^j$ でなければならない。

次のように関数 \hat{T} を定義する。

$$\hat{T}_s^j(p^*) = \begin{cases} p_{(s,j)}^* + 1 & \text{if } |\hat{D}_s^j(p_j^*)| > c_s^j \\ p_{(s,j)}^* & \text{if } |\hat{D}_s^j(p_j^*)| \leq c_s^j, \end{cases}$$

ただし、 $(|\hat{I}_j| + 1) + 1 = 1$ と定める。

p^* が \hat{T} の不動点であることを示すには、全ての s, j について $\hat{T}_s^j(p^*) = p_{(s,j)}^*$ であることを示せばよい。

任意の s, j をとる。前の議論で示した $\hat{\mu} = \hat{\mu}^{p^*}$ という等式と、 $\hat{\mu}$ の実現可能性から、 $\hat{D}_s^j(p_j^*)$ は実現可能である。すなわち、 $|\hat{D}_s^j(p_j^*)| \leq c_s^j$ が成り立つ。

\hat{T} の定義によれば、もし $|\hat{D}_s^j(p_j^*)| \leq c_s^j$ ならば、 $\hat{T}_s^j(p^*) = p_{(s,j)}^*$ となる。これは示すべきことであった。

問題 $(I, S, \succ_I, \succ_S, \mathcal{F}_S)$ を考える。

$i^{(s,j,l)}$ を、学校 s の優先順位 \succ_s に従って並べたときに、集合 $\{i\}_{i \in I_j}$ の中で l 番目に順位の低い教師とする。ここで、次のように定義する。

$$p_{(s,j)} = \begin{cases} p_{(s,j)}^* + |I_j \setminus \{i \in I_\alpha : B(i) = \{j\}\}| & \text{if } \hat{\mu}_s^j \neq \emptyset, \\ |I_j| + 1 & \text{if } \hat{\mu}_s^j = \emptyset. \end{cases}$$

全ての現職教師 $i \in I_\alpha$ について $\hat{\mu}_i^{p^*} = \mu_i^{p^*}$ であり、かつ、全ての非現職教師 $i \notin I_\alpha$ について $\mu_i^{p^*} = \emptyset$ であることを示す。(これは、需要集合について $\hat{D}_s^j(p_j^*) = D_s^j(p)$ であることを示すことと同値である。)

$\hat{D}_s^j(p_j^*) \subseteq D_s^j(p)$ を示す 任意の $i \in \hat{D}_s^j(p_j^*)$ をとる。このとき、定義より $B(i) = \{j\}$ である。 $i \in \hat{D}_s^j(p_j^*)$ であるから、 $i \succeq_s \hat{i}^{(s,j,p_{(s,j)}^*)}$ が成り立つ。このことと、 p の構成方法から $\hat{i}^{(s,j,p_{(s,j)}^*)} = i^{(s,j,p_{(s,j)})}$ であるため、 $i \succeq_s i^{(s,j,p_{(s,j)})}$ が従う。

ここで、背理法により、 $i \succeq_{s'} i^{(s',j',p_{(s',j')})}$ かつ $s' \succ_i s$ となるような $s' \in S \setminus \{s\}$ と $j' \in A(i) \cap A(s')$ が存在すると仮定する。

(仮定5) より、 i の主担当ではない全ての教科 $j' \in A(i)$ ($j' \neq j$) について、 $B(k) = \{j'\}$ となる全ての現職教師 $k \in I_\alpha$ に対して、 $k \succ_{s'}^{j'} i$ が成り立つ。(6)

背理法の仮定より、 $i \succeq_{s'} i^{(s', j', p_{(s', j')})}$ であった。(7) これは、教師 i の優先順位がカットオフ $p_{(s', j')}$ 以上であることを意味するため、不等式で表すと次のようになる。

$$|\{k \in I_{j'} \mid i \succeq_{s'} k\}| \geq p_{(s', j')}$$

また、(6) から、 i よりも優先順位が厳密に高い教師の数は、主担当教科が j' である現職教師の数以上でなければならない。

$$|\{k \in I_{j'} \mid k \succ_{s'} i\}| \geq |\{k \in I_\alpha \mid B(k) = \{j'\}\}| \quad \cdots (8)$$

(7) と (8) より、

$$|I_{j'}| = |\{k \in I_{j'} \mid k \succ_{s'} i\}| + |\{k \in I_{j'} \mid i \succeq_{s'} k\}| \geq |\{k \in I_\alpha \mid B(k) = \{j'\}\}| + p_{(s', j')} \quad \cdots (9)$$

となる。

ケース 1: $\hat{\mu}_{s'}^{j'} \neq \emptyset$ の場合 このとき、 p の定義より、 $p_{(s', j')} = p_{(s', j')}^* + |I_{j'} \setminus \{i' \in I_\alpha \mid B(i') = \{j'\}\}|$ である。これを (9) 式の右辺に代入すると、

$$\begin{aligned} (9) \text{ 式の右辺} &= p_{(s', j')} + |\{i' \in I_\alpha \mid B(i') = \{j'\}\}| \\ &= p_{(s', j')}^* + |I_{j'} \setminus \{i' \in I_\alpha \mid B(i') = \{j'\}\}| + |\{i' \in I_\alpha \mid B(i') = \{j'\}\}| \\ &= p_{(s', j')}^* + |I_{j'}| \end{aligned}$$

したがって、(9) 式は $|I_{j'}| \geq p_{(s', j')}^* + |I_{j'}|$ となる。 $p_{(s', j')}^* \geq 1$ であるから、これは矛盾である。

ケース 2: $\hat{\mu}_{s'}^{j'} = \emptyset$ の場合 このとき、 p の定義より、 $p_{(s', j')} = |I_{j'}| + 1$ である。これを (9) 式に代入すると、 $|I_{j'}| \geq (|I_{j'}| + 1) + |\{i' \in I_\alpha \mid B(i') = \{j'\}\}|$ となる。これは明らかに矛盾である。

ケース 1、2 のいずれにおいても矛盾が導かれた。これは、背理法の最初の仮定 ($s' \succ_i s$ となるような i の主担当ではない教科 $j' \neq j$ が存在する) が誤りであったことを意味する。したがって、 $j' = j$ でなければならない。

ここで、再度背理法により、 $i \succeq_{s'} i^{(s', j', p_{(s', j')})}$ かつ $s' \succ_i s$ となるような $s' \in S \setminus \{s\}$ と $j' \in A(i) \cap A(s')$ が存在すると仮定する。しかし、前段の結論から $j' = j$ でなければならない。したがって、この仮定は、ある $s' \in S_j$ が存在し、 $i \succeq_{s'} i^{(s', j, p_{(s', j')})}$ かつ $s' \succ_i s$ となることを意味する。 p の構成方法 ($\hat{i}^{(s, j, p_{(s, j)})} = i^{(s, j, p_{(s, j)})}$) を用いると、これは「ある $s' \in S_j$ が存在し、 $i \succeq_{s'} \hat{i}^{(s', j, p_{(s', j)})}$ かつ $s' \succ_i s$ となる」ことと同値である。しかし、これ

は $\hat{\mu}^{p^*} (= \hat{D}^j(p_j^*))$ が教科公平であるという事実（証明済み）に矛盾する。したがって、背理法の仮定は偽であり、最終的に $i \in D_s^j(p)$ でなければならない。

$D_s^j(p) \subseteq \hat{D}_s^j(p_j^*)$ を示す 任意の $i \in D_s^j(p)$ をとる。 $i \in D_s^j(p)$ であるから、定義より $i \succeq_s i^{(s,j,p(s,j))}$ が成り立つ。このことと、 p の構成方法 ($\hat{i}^{(s,j,p(s,j))} = i^{(s,j,p(s,j))}$) から、 $i \succeq_s \hat{i}^{(s,j,p(s,j))}$ が従う。また、 $i \in D_s^j(p)$ であるから、その定義より、全ての $s' \in S \setminus \{s\}$ と全ての $j' \in A(i) \cap A(s')$ について、

$$i \succeq_{s'} i^{(s',j',p(s',j'))} \implies s \succ_i s'$$

が成り立つ。特に、教科 j に限定すると、全ての $s' \in S_j$ について、「 $i \succeq_{s'} i^{(s',j,p(s',j))}$ 」ならば $s \succ_i s'$ が成り立つことになる。これは、 i が $\hat{D}_s^j(p_j^*)$ の定義における選好条件 ($s \succeq_i s'$) よりも強い条件を満たしていることを意味する。 i が $\hat{D}_s^j(p_j^*)$ の元であるための条件は、(1) カットオフを満たすこと、(2) 個人合理的であること ($i \in D_s^j(p)$ より成立)、(3) 他の選択肢より s を好むこと、の3つである。上記で示したことはこれらの条件を全て満たすため、 $i \in \hat{D}_s^j(p_j^*)$ である。

この状況において、 p が T の不動点であることを示します。そのためには、全ての $s \in S$ と全ての $j \in J$ について、 $T_s^j(p) = p_s^j$ であることを示す必要があります。任意の $s \in S$ と $j \in J$ をとります。これまでの証明により、 $\hat{D}_s^j(p_j^*) = D_s^j(p)$ であり、また $\hat{\mu}^{p^*}$ は実現可能でした。 $\hat{D}_s^j(p_j^*) = \hat{\mu}_s^j(p^*)$ であり、その実現可能性から $|\hat{\mu}_s^j(p^*)| \leq c_s^j$ です。したがって、

$$|D_s^j(p)| = |\hat{D}_s^j(p_j^*)| = |\hat{\mu}_s^j(p^*)| \leq c_s^j$$

が成り立ちます。関数 T の定義によれば、もし $|D_s^j(p)| \leq c_s^j$ ならば、 $T_s^j(p) = p_s^j$ となります。これは、 p が T の不動点であることを示しています。□

4 結果と考察

5 結論

付録: 証明

反例 1 (予算制約下では、現職必置条件満たさない場合がある)

$s_4, s_5 \in S$ 、 $i_1, i_2, i_3 \in I$ 、 $i_1, i_3 \in I_\alpha$ 、そして $i_2 \in I \setminus I_\alpha$ であると仮定する。

このとき、選好が以下であると仮定する。

$$\begin{aligned}
& \succ_{i_1}: 45\emptyset, \\
& \succ_{i_2}: 4\emptyset 5, \\
& \succ_{i_3}: 54\emptyset, \\
& \succ_{s_4}: 132\emptyset, \\
& \succ_{s_5}: 312\emptyset.
\end{aligned} \tag{5}$$

\mathcal{F}_s が予算制約であるため、これは (1) を満たす。(5) は (2) と (4) を満たします。 $i_1 \in \mu_{s_5}$ かつ $i_3 \in \mu_{s_4}$ となるようなマッチング μ が存在するため、これは (3) も満たす。このとき、 $i_3 \in \mu_{s_5}^*$ となるマッチング μ^* は TOFM だが、 $i_1 \in I_\alpha$ であり、かつ $\mu_{i_1}^* = \emptyset$ であるため、現職必置条件を満たさない。したがって、TOFM は予算制約下で職必置条件を満たさない場合がある。

定理 4. 全ての $s \in S$ に対して \mathcal{F}_s が定員制約であるならば、TOFM は常に現職必置条件を満たす。

証明. \mathcal{F}_s が定員制約であると仮定する。(1) より、TOFM である μ^* が存在する。背理法により、 $\mu_{i'}^* = \emptyset$ となるような $i' \in I_\alpha$ が存在すると仮定する。(4) より、全ての $s \in S$ に対して $s \succ_{i'} \emptyset$ である。(3) より、 $i' \in \mu_{s'}^*$ となるような $s' \in S$ が存在する。 \mathcal{F}_s が定員制約であることから、 $|\mu_{s'}^*| \leq q_{s'}$ である。

場合 1: $|\mu_{s'}^*| < q_{s'}$ のとき

このとき、 $|\mu_{s'}^* \cup \{i'\}| \leq q_{s'}$ である。以下のようにマッチング μ'' を定義する。

$$\mu_s'' = \begin{cases} \mu_s^* \cup \{i'\} & \text{もし } s = s' \text{ の場合,} \\ \mu_s^* & \text{もし } s \neq s' \text{ の場合.} \end{cases}$$

μ'' は実現可能なマッチング (FM) である。 $(|\mu_{s'}^* \cup \{i'\}| \leq q_{s'})$ であるため μ'' は実現可能であり、(4) より個人合理性を満たし、(2) より公平である。) TOFM の定義 (ii) より、 $\mu_{i'}^* \succ_{i'} \mu_{i'}''$ でなければならない。しかし、 $\mu_{i'}^* = \emptyset$ 、 $\mu_{i'}'' = s'$ であり、かつ $s' \succ_{i'} \emptyset$ である。したがって、 $\mu_{i'}^* \not\succ_{i'} \mu_{i'}''$ となる。これは TOFM の定義 (ii) に矛盾する。

場合 2: $|\mu_{s'}^*| = q_{s'}$ のとき

このとき、 $j \in \mu_{s'}^*$ となるような $j \in I \setminus I_\alpha$ が存在し、(2) より $i' \succ_{s'} j$ が成立する。以下のようにマッチング μ''' を定義する。

$$\mu_s''' = \begin{cases} (\mu_s^* \setminus \{j\}) \cup \{i'\} & \text{もし } s = s' \text{ の場合,} \\ \mu_s^* & \text{もし } s \neq s' \text{ の場合.} \end{cases}$$

μ''' は実現可能なマッチング (FM) である。 $(|(\mu_{s'}^* \setminus \{j\}) \cup \{i'\}| = q_{s'})$ であり定員を満たす

ため μ''' は実現可能であり、(4) より個人合理性を満たし、(2) より公平である。) TOFM の定義 (ii) より、 $\mu_i^* \succ_{i'} \mu_i'''$ でなければならない。しかし、 $\mu_i^* = \emptyset$ 、 $\mu_i''' = s'$ であり、かつ $s' \succ_{i'} \emptyset$ である。したがって、 $\mu_i^* \not\succ_{i'} \mu_i'''$ となる。これは TOFM の定義 (ii) に矛盾する。

場合 1 と場合 2 のいずれにおいても矛盾が導かれたため、最初の仮定 ($\mu_{i'}^* = \emptyset$ となる $i' \in I_\alpha$ が存在する) は偽である。したがって、全ての $i \in I_\alpha$ に対して $\mu_i^* \neq \emptyset$ である。ゆえに、TOFM は定員制約の下で常に現職必置条件を満たす。□

参考文献

- OECD (2020) 『TALIS 2018 結果 (第 2 巻) : 教員と校長の専門職としての価値 (日本 : カントリーノート拡張版)』 OECD 出版、パリ.(最終アクセス日: 2025 年 5 月 8 日) https://www.oecd.org/content/dam/oecd/en/about/programmes/edu/talis/talis2018participantnotes/volii/TALIS2018_CN_JPN_Vol_II_extended_jpn.pdf
- 文部科学省 (2022) 『教師不足に関する実態調査』.(最終アクセス日: 2025 年 5 月 8 日) https://www.mext.go.jp/content/20220128-mxt_kyoikujinzai01-000020293-1.pdf
- 文部科学省 『別紙 1 公立学校教員の公募制・FA 制等の取組事例』.(最終アクセス日: 2025 年 5 月 8 日) https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/040/siryo/attach/1379275.htm
- 東京都教育委員会 (2023 年 9 月 29 日). 令和 5 年度東京都公立学校教員採用候補者選考 (6 年度採用) の結果について.(最終アクセス日: 2025 年 5 月 8 日) <https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/information/press/2023/09/2023092901>
- 長野県教育委員会 (2024). 令和 6 年度高等学校教育職員人事異動方針. (最終アクセス日: 2025 年 5 月 8 日) https://www.pref.nagano.lg.jp/kyoiku/koko/saiyo-nyuushi/joho/documents/0_2jinjikoko.pdf
- 広島県教育委員会. 広島県公立学校教職員人事異動方針. (最終アクセス日: 2025 年 5 月 8 日) <https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/kyoiku/04file-h26-jinjihoushin.html>
- 千葉県教育委員会 (2024). 令和 6 年度末及び令和 7 年度公立学校職員人事異動方針. (最終アクセス日: 2025 年 5 月 8 日) <https://www.pref.chiba.lg.jp/kyoiku/syokuin/jinji/idou/documents/r06-jinjiidouhoushin.pdf>
- Gale, D., & Shapley, L. S. (1962). College admissions and the stability of marriage. The American Mathematical Monthly, 69(1), 9–15.

- Roth, A. E. (1984). The evolution of the labor market for medical interns and residents: A case study in game theory. *Journal of Political Economy*, 92(6), 991 – 1016.
- Balinski, M., & Sönmez, T. (1999). A tale of two mechanisms: Student placement. *Journal of Economic Theory*, 84(1), 73 – 94.
- Kamada, Y., & Kojima, F. (2024). Fair matching under constraints: Theory and applications. *The Review of Economic Studies*, 91(2), 1162 – 1199.